



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3350号 2016.11.18 発行

高齢者の悩み解決！シニア家電が熱い

カンテレワンダー 2016年11月14日

高齢化がますます進む中、最近、シニア世代が求める機能が付いた家電が、関西で次々と開発されヒットしています。

【メーカー担当者】「世界一軽いたった2キロの掃除機です」

【男性（65）】「今までの洗濯機とは違う洗濯機。こんなんあるんや！と思った」

“軽さ”や“使いやすさ”が売りの「シニア向け家電」を、いかに生み出してどう売るか、開発と販売の最前線取材しました。



京都市伏見区に住む清水泰子(やすこ)(60)さんは、最近、最新式の洗濯機を買いました。

【清水さん】「昔はこうして(台に)乗って洗濯物を取っていた。腰が悪いから、あまり前に行くとうるさい。今度は手だけで取れるからすごい」身長150センチ足らずの清水さんはこれまで台に乗って洗濯物を取り出していました。

新しい洗濯機はこれまで手前にあった操作盤

が奥にあり、洗濯槽も浅くなっています。

その結果、洗濯機を乗り越えなくても立ったまま洗濯物を取り出せるようになりました。

【清水さん】「今度の洗濯機はちょっと（つま先を）上げたら取れる」

このように高齢者が使いやすいようちょっと工夫した家電...いわゆる“シニア家電”は、団塊の世代が定年退職を迎えた2010年頃から増え始め、洗濯機以外にも次々に発売されヒットしています。

【ビックカメラ家電コーナー・河本奈津美さん】「こちらのシャープの冷蔵庫は、真ん中に野菜室が付いているので、食品を取り出すのに腰をかかめることなく取り出しやすくなっています」

中でも炊飯器は、子どもが独立した単身や二人暮らしの高齢世帯を想定して、どのメーカーも少ない量でも美味しく炊き上がるモードなどを搭載。

シニア世代が喜ぶ機能が付く分、少々お値段は張りますが、

【78歳の男性】(Q 買う基準は安さ？機能?) 「機能です。電器製品は一度買ったらかかり持ちますから10年15年。買うときは少々高くてもいい機能が充実しているのがいい」

去年行われた家電の購買動向調査では、「高くても質を求める」と答えた人の割合は40代で40%。50代で42%。60代で44%。

つまり、年齢を重ねるごとに「安さ」より「機能」を求める人が増えるのです。

人気の「シニア家電」に、特に力を入れるメーカーがパナソニックです。

シニア世代の使い勝手を重視し機能を高めた家電を「Jコンセプト」シリーズと名付け、おととしから冷蔵庫や洗濯機など6つの製品を開発。

累計500億円の売上げ目標を予定より1年早く達成しました。

中でもこの掃除機は、本体の重さが2キロと紙パック式としては世界最軽量を誇り、販

売台数が異例の25万台を突破しました。

ペットボトル1本分という驚きの軽さのワケは、その素材にあります。

【パナソニックリビング商品課 小杉彩担当課長】「これまでの掃除機に使っていた樹脂は、強度を保とうとすると重くなっていたが、PPFRPという新しい素材を使うことで非常に軽く強度も実現できた」

「PPFRP」という丈夫なプラスチックを業界で初めて採用し、カバーの中に繊維のように織り込むことで、軽さと強度の両立に成功しました。

さらに、内部をコンパクトにするためコードを縦巻きから横巻きに変更。

その結果、以前のモデルに比べサイズや重さがおよそ半分になったのです。

価格はおよそ5万円とやや高めですが、軽さを求めるシニア世代に受け入れられ、売り上げの7割を50代以上が占めています。

ところ変わって、こちらは大阪・心斎橋にある生活用品メーカーのアイリスオーヤマの開発拠点。

【アイリスオーヤマ 開発リーダー 佐藤貴英さん(35)】「メールも出すから確認よろしくをお願いします！」

テキパキと電話で指示を飛ばす、佐藤貴英さん。

電話を終え、すぐさま別のフロアに移動。取り出したのは...ふ、布団？ひょっとして仕事中に仮眠ですか？

いやいや～！布団乾燥機のテストです。

佐藤さんはこの製品の生みの親。

各メーカーが鎬を削る布団乾燥機市場。

アイリスは去年本格的に参入したばかりにも関わらず、売り上げトップクラスを誇ります。

佐藤さんに開発を決意させたのは、家で見た“身近なシニアの姿”でした。

【佐藤さん】「身長150センチぐらいの母親が小

さな体で非常に苦しそうにベランダまで持って行って、『よっこらせ』と布団を干している姿が非常に痛ましい。見ていて何とかしたいと思った。それが開発の動機というか発端になったところ。従来の布団乾燥機はマットがあって、それを布団の中に入れてマットを膨らませて布団を乾燥させる形だったが、マットの出し入れが非常に面倒臭い」

そこで佐藤さんは、「マットを使わずホースを布団に入れるだけで乾燥できないのか？」と考え、ホースの先に“ある工夫”をしたのです。

【佐藤さん】「この製品の最大の特徴は、吹き出し口にフラップ機構が備わっています。高さを稼ぐ分、掛布団を持ち上げてくれる。これによって掛布団と敷布団の間に空間を作り出す。その空間に温風を吹き出すと、従来のものより広範囲に温風を届ける効果が望める」

機能をシンプルにした結果、コストも抑えられ、他社製品のおよそ半額の1万5千円前後で発売されると大ヒットとなりました。



シニア家電に活路を見出すのはメーカーだけではありません。

こちら滋賀県大津市のアトム電器。

今はですっかり少なくなった「町の電器屋さん」です。

店長の木村伸之(のぶゆき)さんは、(下)シニア家電ブームの波に乗りたいと意気込んでいます。

【木村さん】「すみません。アトム電器です。お世話になります～」

この日は、あの世界一軽い、パナソニックのシニア向け掃除機を納めた得意先の様子を見に来ました。

【木村さん】「前の掃除機に比べてどうですか？」

【吉田秀男さん(81)】「軽いさかい。持ち運びが楽。2階に行ったりするとき、前のやつは重かった」

「階段の掃除が楽になった」と喜ぶのは 81 歳の吉田秀男 (ひでお) さん。

アトム電器の顧客の大半はこうしたシニア世代です。

ここから「町の電器屋さん」が本領を発揮します。

【木村さん】「ついでにエアコンを見ときますわ～。ホコリがね自動で掃除してくれるんだけど、ホコリがここにたまるようになっているんです」

【吉田さん】「ごめんなあ」

【木村さん】「いえ、これは年に一回ぐらいでエシ、ちょっとまた見に来ます」

アフターケアは基本的に無料。電話一本ですぐに駆けつけてくれることから、吉田さんは、量販店より高くても家電は全てアトム電器から購入しています。

シニア向けの家電と丁寧なサービスで、お客さんの心をガッチリつかんだ木村さん。

店の売り上げはここ数年で倍増し、年間 1 億 2000 万円を超えました。

【木村さん】「売り上げも大事だけど、町の電器屋は売り上げを追うスタイルではダメ。お客さんが喜んでもらえることを、ウチらはひたすら目指している。そういう商品が出たら嬉しい」

ますます加速する高齢化の中、シニア世代にどれだけ寄り添えるかが、メーカーや販売店が生き残る上でカギとなっています。



いじめ防止へ教材集 文科省、道徳授業に活用

日本経済新聞 2016年11月17日

道徳の授業でのいじめ防止教育を充実させるため、文部科学省は各地で実際に発生した事例や授業での実践例などをまとめた教材集を作成する。子供が書き込んで議論できる教材も作り、今年度中に同省ホームページ上に設置する「アーカイブセンター」から教員が自由に活用できるようにする。松野博一文科相が16日の衆院文部科学委員会で明らかにした。

文科省は小中学校の「道徳の時間」向けに2014年に教材「私たちの道徳」を作り全国に配布。この教材にもいじめに関する記載はあるが、新たな教材集は子供の発達段階を踏まえ、より多様な事例を盛り込む。低学年向けには動物に例えて分かりやすく説明したり、高学年向けでは事例を基にささいな言い方の違いが誤解を招いて仲間はずれになった事例

などを紹介する。

松野文科相は16日の委員会で「なぜいじめが起こるのか、なぜいけないと分かっているも止められないのかなどについて、自分のこととして考えることが大切だ」と話し、近く教員向けにメッセージを発表することも表明した。

「道徳の時間」は現在教科外に位置付けられており、小学校で18年度、中学校で19年度から教科書を使う「特別の教科 道徳」となる。

部落差別解消法案が衆院通過＝今国会成立へ

時事通信 2016年11月17日

部落差別解消に向けた教育・啓発促進などの施策を柱とする新法案が17日の衆院本会議で、与党と民進党などの賛成多数で可決された。参院に送付され、今国会で成立する見通し。

同法案は「部落差別を解消する必要性に対する国民の理解を深めるよう努め、部落差別のない社会を実現する」と明記。国や地方自治体に対し、相談体制の充実や教育・啓発活動を求めている。国が自治体の協力を得て部落差別の実態調査を実施することも盛り込んだ。

障害者発 情報誌に静岡版 創刊号は「誰だってかわいく」

静岡新聞 2016年11月17日



次号の「ココライフ女子部静岡版」の打ち合わせを行う編集長の北林由佳さん（左）と渡辺富士雄さん＝11日、浜松市中区

全国発行している女性障害者向けフリーペーパー「ココライフ女子部」の静岡版がこのほど、地域版として全国で初めて県内で発刊された。ファッション情報や女性障害者の本音、活躍などを紹介する冊子。全国版と同様に静岡版も障害者が編集者やライター、モデルを務める。「障害者が輝き、バリアフリーが進むきっかけになれば」。同誌には作り手のこんな熱い思いが込められている。

静岡県内で2千部発行された静岡版の創刊号（全16ページ）は全国版の10ページに加え、静岡版として県内情報を6ページにわたって掲載した。「誰だってかわいくなれる」をテーマに女性障害者や編集スタッフが行きつけの美容室を紹介。「車いすでも大丈夫」「トイレが広い」などバリアフリーのポイントを生々の声で伝えた。

その一人が反射性交感神経性ジストロフィーなどの障害がある静岡版編集長の北林由佳さん（35）＝浜松市北区＝。初めての原稿執筆や編集に取り組むとともにメーキャップして創刊号の表紙を飾り、念願だった“モデルデビュー”も果たした。障害者が作製作業に携わる利点について「読者が共感しやすく、本人や家族も自信を持てる」と実感を込める。

ココライフ女子部は2012年8月創刊。年4回、各1万部を発行している。全国版発行元の都内のNPOが地域版の協力者を求めていたところ、発行元と親交があり、自身も車いす生活を送る浜松市中区の渡辺富士雄さん（36）が手を挙げた。

現在は障害者の編集者やライター、モデルをはじめ、スポンサー、ボランティアなど40人が発行に携わる。12月発行予定の次号は静岡版のページ割合を増やし、障害者が通っている県内カフェを特集する予定だ。「(同誌を通じて)障害者が外出することへの抵抗が無くなれば。店や地域の意識も変えていきたい」と北林さんと渡辺さんは声をそろえる。

人手不足解消へ フリーランスの働き方の普及検討 NHK ニュース 2016年11月17日

経済産業省は、深刻化する人手不足を解消するには、特定の会社などとは雇用関係を結ばずに仕事をするフリーランスと呼ばれる働き方を普及させることが一つの手だてとなる

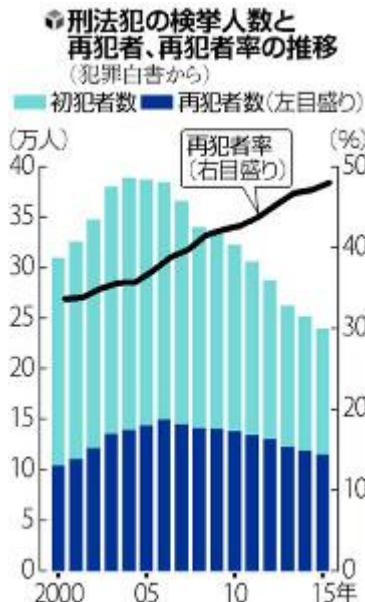
として、具体的な課題などについて検討を始めました。

経済産業省は、深刻化する人手不足など日本が抱える課題の解決につながる新しい働き方について、有識者による研究会を設けて検討を始めました。

この中で、経済産業省は、新しい働き方として、特定の会社や団体と雇用関係を結ばずに複数の会社などから仕事を請け負うフリーランスと呼ばれる働き方が有効な手だてとなると説明しました。

経済産業省はこの働き方を普及することで、介護や子育てに携わっていても、働く人が今よりも柔軟に仕事を選ぶことができ、女性を中心に潜在的な働き手が掘り起こされること、企業側も必要に応じて多様で高い能力を持つ人材を活用できることなどをメリットとして説明しました。

一方で、企業との雇用関係を前提としている今の社会保障の仕組みを見直す必要が出てくること、働く人の立場が弱くなり、長時間労働を強いられるおそれがあることなどが課題として示されました。このため研究会では、すでにフリーランスとして働いている人たちの実態調査を行うことにし、今年度中に普及のための報告書を取りまとめることにしています。



受刑者再犯防止、地方も立案...推進法案成立へ

読売新聞 2016年11月17日

政府は受刑者の再犯防止に向け、地方自治体も含めた総合対策に乗り出す。

17日午後に衆院を通過した「再犯防止等推進法案」の成立後、国と自治体がそれぞれ2017年にも再犯防止推進計画を策定する。昨年の検挙人数に占める再犯者の割合は過去最高を記録しており、現在の関係省庁だけの取り組みでは、再犯防止は困難と判断した。

再犯防止等推進法案は、自民、民進など各党の合意で衆院法務委員長が委員長提案し、今国会で成立の見通し。政府が再犯防止のための計画を策定するとともに、必要な法整備や財政支援を行うよう明記されている。実施した施策を毎年、国会に報告するよう義務づけ、各自治体にも、地方版の計画を定める努力義務を規定。国と自治体との連携や、民間団体への情報提供なども盛り込まれた。

<介護か虐待か 苦悩する家族> (上) 暴れる母を止めただけ 傷害致死容疑

中日新聞 2016年11月16日

重子さんの写真を見ながら「認知症で母も苦しかったと思う」と話す佐保ひかるさん(左)と輝之さん=大阪市東淀川区で

認知症が原因となり暴れる親を制止したことで、家族が虐待を疑われる事例がある。中には逮捕され、職を失った人も。親の介護はただでさえ負担が大きいのに、虐待の疑いもかけられた家族は途方に暮れる。

「部屋で暴れてつかみかかってきた母の腕をつかんで、制止しただけなのに…」。大阪市東淀川区、元大阪大歯学部助教の佐保(さほ)輝之さん(56)は唇をかむ。



“事件”があったのは二〇一一年六月二十日未明。佐保さんによると、同居していた母親の重子さん＝当時（80）＝が突然暴れ始めた。佐保さんと妻のひかるさん（53）、父（88）の三人がなだめ、二時間後にやっと重子さんが落ち着いた。ところがその晩、重子さんが肋骨（ろっこつ）骨折による外傷性ショックで死亡。九カ月後、佐保さん夫婦は母親への傷害致死容疑で逮捕された。

佐保さん夫婦は一貫して無罪を主張したが、一審は懲役八年の有罪判決。二審では、重子さんが認知症の影響で暴れていた可能性を認め、肋骨骨折は佐保さん夫妻による暴行によるものとはいえないと判断。一審判決を破棄した上で、母親を止めるため体をつかんだことなどが暴行に当たるとして、暴行罪で罰金二十万円の有罪判決を言い渡し、確定した。

「母親への虐待事件」という検察側の見方が否定されたのは、認知症の人と家族の会（京都市）副代表理事で、認知症専門医の杉山孝博さん（69）による意見書がきっかけだった。

意見書で杉山さんは、重子さんは普段の言動から認知症の可能性が高かったと判断し、激しく暴れるのはその症状の一つと指摘。「肋骨骨折は、介護の混乱の中で偶発的に起こった出来事であって、虐待によって発生したものではない」と主張した。

「認知症の人が暴れるのはよくあること。逮捕までの九カ月間に、警察は介護関係者らに介護の実態がどのようなものであるのか聞いたのか」。杉山さんは警察の対応を批判する。

佐保さんによると、両親とは〇八年から同居。以前はおとなしかった重子さんが、父親のことを「このおっさんが」などと厳しくののしったりたたいたりすることがあり、精神的に不安定になっていると感じたためだ。佐保さんは、重子さんに受診をすすめたが、拒否したという。

暴れた時の重子さんは普段より素早く、力強かった。肋骨を折った時は、額には大きなたんこぶと切り傷ができていたが、痛そうなそぶりも見せなかった。「反発したら、よけい食って掛かってくる。ずっとがまんしていた」と父親は振り返る。

認知症はもの忘れや、外出して家に帰ってこられない徘徊（はいかい）が主な症状と思われがちだが、人によって暴れることが多いのはあまり知られていない。

佐保さん夫婦の主張が二審で認められたとはいえ、逮捕の代償は大きい。佐保さんは大学を解雇され、収入を絶たれた。「医療に関わる者の端くれなのに、認知症への理解が乏しかった。母も正しい助けを得られず、苦しかったと思う」と、母親の病気にきちんと向き合えていなかったことも後悔する。

今は、自分たちのような体験をする人をなくそうと、全国で講演している。（出口有紀）

<介護か虐待か 苦悩する家族> (下) 支援センター頼って 密室の危うさ



中日新聞 2016年11月17日

密室の在宅介護の危うさについて語る杉山孝博さん＝川崎市で

家族らによる高齢者虐待と認定された件数は、年々増え続けている。厚生労働省の調査では、二〇〇六年度に一万二千五百六十九件（通報一万八千三百九十件）だったのが、一四年度には一万五千七百三十九件（同二万五千七百九十一件）になった。

増加の背景には、〇六年度に施行された高齢者虐待防止法がある。高齢者の人権を守るため、虐待と疑われる事例を発見した人に、市町村への通報を義務付けた。

端緒となるのは「体にあざができて」「頭にこぶがあった」などが多い。ただ、高齢者の骨や皮膚は若者よりはるかに弱く、自室で転んだり、頭をぶつけただけでも青あざやこぶができたりする。介護の現場ならよくあることだが、知らない「こんなひどい傷は、

自分でつけられるわけがない」と考えてしまう。

三重県内に住むパート女性（45）は、自宅で介護していた母親（76）への虐待を疑われ、九月から母親が自治体に保護されている。「母と会えなくなって二カ月以上たつ。心配で仕事も手に付かない」と悩む。

女性によると、母親は二年前、レビー小体型認知症の診断を受けた。この認知症は実際にはないものが見えるように感じる「幻視」や、動作の障害が特徴で、認知症全体の二割を占める。

今年に入り、母親は自室で着替えようとして転んだり、玄関でふらついてげた箱に頭を打ったりして、あざができるようになった。転ばないように手を貸すと嫌がるが多かった。八月、女性が夕食を作っていると、母親が外に出て行こうとした。女性は「母を止めようと玄関でもみ合いになり、母のおでこに私の頭がぶつかったため、母親の額にはこぶができ、後に内出血で黒くなった」と話す。

その二週間後、母親は通っていたデイサービス施設で自治体に保護された。女性には直接の連絡はなく、愛知県内に住む姉に自治体担当者から電話があり、「お母さんは他の施設に移られます」と説明されたという。女性は「母は細かい状況説明ができず、二人暮らしでは虐待ではないと証明もできない。住み慣れた地域で暮らしたいという母の思いを優先したのに…」。

母親を保護した自治体は「個人情報には答えられない」とした上で、「一般的には、法に基づいて高齢者の身体と生命に危険があると判断した場合に保護する」としている。

暴力や暴言などの激しい症状のある認知症の人に、家族はどう対応すればいいのか。

「密室の在宅介護では、誰でも告発される可能性がある」。認知症の人と家族の会（京都市）副代表理事で、認知症専門医杉山孝博さん（69）はこう指摘し、「認知症の人を力で押さえつけたり、言葉で非難したりすると、混乱がひどくなることもある。家族は話を合わせながら、他の方へ関心を持たせるようにして」と助言する。

高齢者虐待問題が専門の日本大学教授山田祐子さん（52）も「虐待との意識がなくても、結果的にけがをさせてしまえば疑われる場合がある。懸命に介護する家族にはつらいが、介護にはそういうリスクがある」と話す。

地域の包括支援センターに介護の状況を頻繁に伝えていっていると、介護者が孤立する状況は避けられる可能性があるため、認知症が進行して在宅介護が難しくなった時に備えて「早めに施設入所などのサービスを使うことを考えて」と勧める。（出口有紀）



ソーシャルワーカーを養成して70年 日本社会事業大学が記念式典開く



福祉新聞 2016年11月16日 編集部
あいさつする潮谷理事長

日本社会事業大学（潮谷義子理事長）が創立70周年を迎え、記念式典が5日に都内で開かれた。300人が参加した。

同大学は、1946年に厚生省（当時）から委託を受け、日本社会事業学校として設立。指導的な福祉従事者やソーシャルワーカー（SW）を養成する日本で唯一の教育機関として、福祉系大学のモデル的役割を果たしてきた。

開会のあいさつで潮谷理事長は、GHQの要請を受けて同大学が創設された経緯や、あ

らゆる福祉分野でリーダーを輩出してきた実績を紹介。「厚生労働省から委託されている唯一の大学として、他の福祉系大学との存在の違いを示さないといけない。70周年を単なるセレモニーで終えてはならない。真のSWを養成するとともに、質の高い研究教育、実践に取り組んでいきたい」などと述べた。

来賓祝辞では、定塚由美子・厚生労働省社会・援護局長と斎藤十朗・全国社会福祉協議会会長が「地域包括ケアを担うことができるSWを養成してほしい」などと要望。同大学名誉博士の阿部志郎・横須賀基督教社会館長は、60年代の大学紛争の際に学生と大学側が対話の姿勢を崩さず紛争解決したことを評価。「その伝統を受け継ぎ、さらに充実してほしい」と語った。

このほか、ケネディ・駐日米国大使からのお祝いのメッセージを紹介、政治学者の姜尚中氏の特別講演「共苦・共助・共生社会を求めて」が行われた。

流行語大賞 SMA P解散、ゲス不倫、PPAP、ポケモンGO…候補 30 語発表



スポニチアネックス 2016年11月17日
 (左上から時計回りに) ベッキー、川谷絵音、鈴木誠也(広島)、斎藤司、ピコ太郎、小池百合子東京都知事
 年末恒例「2016ユーキャン新語・流行語大賞」(現代用語の基礎知識選)の候補30語が17日発表された。芸能関係から「ゲス不倫」「SMA P解散」、スポーツ関連ネタでは、今夏のリオデジャネイロ五輪から「タカマツペア」やプロ野球広島の「神ってる」などがノミネート。トップテン&年間大賞は来月1日に発表される。

芸能関連では、タレント・ベッキー(32)と人気ロックバンド「ゲスの極み乙女。」のボーカル・川谷絵音(27)との不倫報道を発端に、芸能界で次々と発覚したスキャンダルを称した「ゲス不倫」、その不倫疑惑を数々報じた週刊文春に関連した「文春砲」「センチンスプリング」。また今年限りで5人そろっての姿が見納めになる「SMA P解散」、世界規模で人気となったピコ太郎の「PPAP」も選出された。

スポーツ関連は、今夏日本中に感動を与えたリオ五輪で金メダルを獲得したバドミントンの「タカマツペア」。プロ野球界からは、25年ぶりのリーグ優勝を果たした広島の緒方監督が2試合連続で決勝弾を放った鈴木誠也外野手(22)を表した「神ってる」もノミネート。昨年の「トリプルスリー」に続けるか注目が集まる。

また「都民ファースト」「アスリートファースト」「盛り土」など東京都の小池百合子知事に関する用語も挙がったほか、社会現象となった「ポケモンGO」、海外からは「トランプ現象」「パナマ文書」なども入った。

候補の30語は以下の通り(50音順)。

アスリートファースト/新しい判断/歩きスマホ/EU離脱/AI/おそ松さん/神ってる/君の名は。/くまモン頑張れ絵/ゲス不倫/斎藤さんだぞ/ジカ熱/シン・ゴジラ/SMA P解散/聖地巡礼/センチンスプリング/タカマツペア/都民ファースト/トランプ現象/パナマ文書/びっくりぼん/文春砲/PPAP/保育園落ちた日本死ね/(僕の)アモーレ/ポケモンGO/マイナス金利/民泊/盛り土/レガシー



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
 大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行